
彼女と僕の霊の相談所

Gepa.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女と僕の霊の相談所

【Nコード】

N0420Y

【作者名】

G e p a .

【あらすじ】

「ねえ、君憑かれてるよ。」入学早々、突然クラスメイトの柏奈岬にそんなことを言われた向憂乃。除霊するからと連れて行かれた場所はただの空き教室。そこを彼女は「相談所」と呼んだ。霊が見えるという彼女を最初は信じられないでいたが、憂乃も霊が見えるようになってしまい、「相談所」のメンバーに加わることに……。ちよつと情けない男憂乃と、彼が昔会った初恋相手の面影をもつ、ちよつと変わった女の子岬の、「相談所」を舞台にした幽霊系ラブコメ。

よろこばばいじ覽くだせら。

市民体育館の外で塀に隠れて独り涙を流していた。すると、足音がコツコツと聞こえてきて塀のすぐ側まで来たところで音が止まった。

「泣いてるの……?」

塀の向こう側から少女の声が聞こえた。

「泣いてなんかないっ!」

鼻をすすって強がって言ったが、その声は震えて情けない叫びだった。

「さっきの試合おしかったね。負けちゃったけどすごくかっこよかったよ。」

どうやらさっきの試合を見ていた人らしい、声に聞き覚えはないが、僕と同じ位の歳の人であろうまだ幼さが残る声だった。慰めようと明るい声で声を掛けてくれていた。

「うるさい……うるさいっ!」

しかし僕はやつ当たりで彼女を怒鳴った。

「……。」

しばらく二人の間に沈黙があった。

僕が少し冷静になってきたところで彼女が塀のこちら側にまわってきて、手を差し出してこう言った。

「前を見て行きよう。」

演技くさい調子で彼女は言った。

「前を見て歩かなきゃ、進む道がわからないよ。……もう行こう、表彰式が始まるよ。」

僕は目をこすり、その手を取って体育館の中に戻っていった。

とても懐かしい夢を見た。名前も知らないし、顔も覚えてない彼女に言われた言葉。どこでも似たような事は聞いたことはあるけど、あのときの彼女の言葉は僕の胸に響き、忘れられないものとなった。懐かしい思い出に駆られ襖を開けた。そこにあつたのはかつての栄光の証、剣道全国大会中学生の部第三位と書かれた楯。これは三年前の夏、僕が中学一年生のときにとつたものだ。あの思い出は近所で開催されたこの大会で、準決勝で敗れた後の話だ。

今はもう剣道をやっていない、あの試合の後次の大会を迎える前には剣道をやめた。彼女の言葉は剣道では活かされず、別の形で僕を慰めることになった。

ふっと自嘲するように笑って、そつと襖を閉めた。

コンコン、とノックの音がして、

「ゆうにいい、入学早々遅刻するよ。」

と妹の早菜あなに声を掛けられ、軽く返事をして部屋を出た。

階段を下りてリビングへ向かうと、いつも通りテーブルの上に朝食が二人分用意してあつた。一つは自分の分、もう一つは父親の分だ。早菜は部活の朝練があるので、もう食べ終わっている。

今、家の家事はほとんどが早菜がやってくれている。母親は二年半前に事故で亡くなった。僕が剣道をやめたきつかけでもある。

僕は当時かなりの母親好きで、剣道も自分が楽しくてやっていたというより、自分が勝つことで喜ぶ母親を見ることを楽しみに剣道をしていたくらいだ。だからこそ、母親が亡くなった後、剣道を続ける気持ちになれずやめることにしたし、母親の死は当時の僕にはあまりにも衝撃的で、二ヶ月間ほど学校にも行かずに部屋に閉じこもったこともあつた。そのときに立ち直るきつかけとなつたのが、名前も知らない彼女の言葉だつた。

部屋から出なくなつてしばらくしたとき、父親がある手紙を持ってきてくれた。それは手紙といつても一枚のメモ帳を綺麗にたたんだだけのものだったが、その表面には、向憂むかいゆう乃くんへ、と丸い文字で僕の名前がかかれていた。それを開けると、

《前を見て行きよう！前を見て歩かなきゃ、進む道がわからないよ。
＼（＾　＾）／》

差出人の名前はなかったが、これを見た瞬間あるとき彼女の手紙だと確信した。泣き顔を隠すためにずっと顔を背けていたので、顔も覚えていなかったけれど、その言葉になにか力をもったような気がして、その後ほどなくして学校へ行くようになった。

きつと似たような言葉を彼女以外の人に言われても、僕は心を動かさなかっただろう。間違いなく彼女は僕の初恋の相手だった。

「行つてきまゝす。」

「ご飯を食べていると早菜が声を掛けて横を通り過ぎていった。

「行つてらっしゃい。」

と返事を返すとさっさと家を出て行った。

早菜は僕と一緒に剣道を始めたが僕とは違いまだ剣道を続けている。母親の死に妹も同じようにショックを受けただろうが、僕みたいに落ち込むわけではなく、母親の代わりに家事を覚えようと頑張った。早菜は母親の死を超えて強くなった。それまでは結構なお兄ちゃん子だったが、僕が引きこもっていたせいもあってか兄に頼ることは無くなった。剣道も昨年度の大会で全国二位となり、中学三年になる今年度では全国制覇を期待されている。

「ご飯を食べ終わり、食器を片付けた後二階に上がり、自分の部屋に戻る前に父親の部屋の扉を少し強めにノックして、

「父さん、起きなよ。」

と声を掛けると、

「うあゝ……。」

と呻き声のような返事が返ってきたので、部屋に戻って仕度を始めた。

真新しい制服を着て鏡に向かう。灰色のスラックス、赤いネクタイに紺色のブレザー。今日から僕が通うことになる平池高校の制服

だ。ここ近辺ではそれなりに学力が高い学校であるが、猛勉強の結果なんとか合格することができた。歩いていけるくらいの距離にあり、登校にも苦勞しない。

準備を整えて一階に下りると父さんが朝食を摂っていた。

「おはよう、憂乃……。」

眠たそうな声で父さんが言った。

僕や早菜は父さんとあまり似ていない、どちらも容姿は母親似なのだ。あえて似ている点をあげるなら童顔なところだろう、できればその百八センチを超える長身は遺伝させて欲しかった。今年四十歳になるはずのサラリーマンだが、見た目はまだ二十代後半だ。うちのことをよく知らない人を見ると、少し歳の離れた兄に思われるかもしれない。

威厳というものが全くない父親だが、僕は良い父親だと思う。元々よく僕らと遊んでくれていたし、母が死んでも僕らの前では悲しい表情を見せず、僕が引きこもったときも、出てきたときもいつもと変わらない態度で接してくれた。きつと色々言われていたら逆にもっと苦しむことになっていただろう。

「おはよう、じゃあ行ってくるわ。」

「行ってらっしゃい。」

僕は軽く挨拶を交わして家を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0420y/>

彼女と僕の霊の相談所

2011年10月30日03時10分発行